

ノリの社会学

小川博司*

1980年代の日本では、「ノリ」という言葉が、青年層の間で頻繁に使われるようになった。今日では、ごく日常的な言葉として用いられている。本報告の目的は、なぜ「ノリ」という言葉が1980年代の日本で台頭したのかを明らかにすることにある。すなわち、「ノリ」という言葉により示される、人びとの感覚の変容、コミュニケーションの様式の変容を考察するとともに、そうした変容をもたらした社会的背景を考察する。

そのためには、「ノリ」という言葉の元来の意味を考察するとともに、その今日的な意味を考察しなければならない。「ノリ」という言葉は、音楽用語でもあるので、音楽との関連にも注意を払わねばならない。

以下、第1節においては、「ノリ」という言葉が、いつ頃からどのような形で台頭してきたかについて述べる。第2節では、「ノリ」という言葉の意味について考察する。第3節では、「ノリ」という言葉の台頭について、広く社会的な文脈において考察する。最後に、日本列島、沖縄諸島、朝鮮半島にみる「ノリ」という言葉の広がりから、これからの文化と社会の行方について考察する。

1. ノリの台頭

● 日常語におけるノリという言葉の台頭

ノリという言葉は、近年新しくできた言葉ではない。後に述べるように、非常に古い言葉であり、これまでも日常的に用いられてきた。ここで問題にしたいのは、この古い言葉が1980年代になってから、青年層の間で頻繁に用いられるようになったということである。

ひとつのデータを示そう。『びあ』（首都圏

* 本学社会学部

版)という雑誌がある。それは、音楽、映画、演劇などの情報を掲載している情報誌であるが、巻末に「YOU とPIA」という読者の投書欄を設けている。ここには、読者からコンサートや観劇についての感想が掲載される。この投書欄に読者から寄せられた投稿のなかに、「ノリ」もしくは「ノル」という言葉がどれくらいの頻度で出てくるかをひとつの指標としてとりあげる(表参照)(注)。

この欄に「ノリ」とか「ノル」という言葉が初めて現れたのは1983年である。その後少しずつ増加し、1984年から1988年にかけてピークを迎えた。具体的な例を示そう。

ボウイも、みんながただ、じーっと聞いているよりも、もっとエキサイティングして踊りまくるぐらいのった方が、気分よく歌えたんじゃないかと思います。

(1983年12月2日号)

12月27日、待ちに待った SEIKO LAND IN 武道館に行ってきました。一步下がった見方、つまり元旦にオンエアされたこのコンサートを見た限りでは、やはり「聖子の魅力を遺憾なく発揮した、完璧なコンサートで、ファンのノリも素晴らしかった」ということになるのですが、私を含めた西側及び東側の人達にとってはノリたくてもノレなかったコンサートでした。……

(1984年2月10日号)

……この日はコンサートの模様の映画撮影があったようです。そのせいで見えない席も一杯にしたそうですが、二度と見るのできない、かけがえのないステージだったのに、

つくづく残念でなりません。思いっきりのりにのってきたつもりだけど、私のうしろの人たちは、（席のことでかどうかわかんないけど、ちょっとしらけていたので）、私が立ち上がるとステージが見えないと思って、私はムリに座ったままのってました。……

（1984年2月24日号）

これらは、ポピュラー音楽のコンサートの出来を判断する際に、「ノリ」が重要な役割を果たしていることを示している。ノレるかノレないかがコンサートの善し悪しを決めるようになった。コンサートにおいて、ミュージシャンが観客に「ノってるかい」「ノっていこうぜ」などと語りかけるのが当たり前になっていった。観客はノルためにコンサートに出かける。演奏がいいから立ち上がるというよりも、ノルために立ち上がるといったノリの自己目的化とでもいえるような傾向も見られるようになった。

さらに、以下のような使用例も見られる。

……大瀧詠一、佐野元春、山本達彦などの東京のりポップスとでもいうべき音……

（1983年7月1日号）

……そう、このエネルギー、このパワー、これぞサザンのノリ、湘南のノリ。私もその中に還って行った。……

（1988年9月2日号）

ここでの「〇〇のり」は、「〇〇風」「〇〇調」といった意味合いで用いられている。ここでは、「ノリ」は、音楽の特性に基づく類型を示す言葉となっている。

それでは、この時期「ノリ」がポピュラー音楽の領域において、重要な概念として盛んに使われるようになったのは何故なのだろうか。最も有力と思われる理由は、ロックの浸透である。

1950年代半ば、アメリカ合衆国で生まれたロックンロールは、レコードとラジオに乗って世界中を席卷した。1950年代末から60年代初めにかけては、欧米のポピュラー音楽に日本語の歌

詞をつけ日本人の歌手が歌うカバーバージョンの全盛期だった。当時の欧米のポピュラー音楽は、エルヴィス・プレスリー、ポール・アンカ、ニール・セダカなどオリジナルの歌手の歌唱よりも、カバーバージョンを通して受容された。

1960年代に入ると、ロックは英米を中心に確固たる勢力をもつようになった。日本では、1966年、ザ・ビートルズが来日公演を行った頃から、カバーバージョンではなく、直接オリジナルの歌手の歌唱を聞くという態度の方が有力になった。英語の歌詞の意味がたとえ十分に理解できなくても、まずはサウンド自体を受けとめようというのである。同時にミュージシャンも、欧米のポピュラー音楽をカバーしたりコピーするにとどまらず、オリジナル作品を作る力をもつようになった。

1960年代末から1970年代初めにかけて、日本語がロックのリズムに馴染むのかどうかが問題になった。一方、日本語はロックのリズムには馴染まないで、ロックはあくまでも英語の歌詞でやるべきだという立場をとるミュージシャン、他方、なんらかの工夫をして日本語をロックのリズムに乗せることを試みるミュージシャンがいた。いずれの立場をとるにせよ、ミュージシャンにとっては、ロックのリズムにいかに乗るかが問題となった。この時、音楽の現場で「ノリ」とか「ノル」という言葉が頻繁に使われるようになったと推測することができる。

さらに1980年代に入ると、パンク系のロックが日本でも主流となってきた。70年代の半ばにイギリスで台頭したパンクは、縦方向に飛び跳ねるようなリズム感が特徴だった。このノリは従来の横に揺れるノリと区別するために、日本では「タテノリ」と呼ばれた。この「タテノリ」の台頭も、日本のポピュラー音楽の現場において、「ノリ」という言葉が多用されるのに拍車をかけたように思われる。

以上のように、1980年代、まずポピュラー音楽の文脈で、「ノリ」という言葉が頻繁に使われるようになった。そして、「ノリ」という言葉は、ポピュラー音楽の文脈を離れて、さらに広く用いられるようになった。

●音楽以外の文脈への「ノリ」の浸透

「ノリ」のポピュラー音楽以外の文脈への浸透については、次の二側面を指摘しておきたい。第一に、コンサート会場以外の場所でコンサートと同じ様な「ノリ」が求められるようになったこと、第二に、音楽以外の文脈で広く「ノリ」という言葉が用いられるようになったことである。

第一の側面については、例えば観戦スポーツの場でも「ノリ」が求められるようになった。プロ野球のスタジアムでは、応援団が太鼓やトランペットを使って応援するようになった。観客は音楽に合わせて声を揃えて応援する。球団によっては、選手それぞれにテーマソングを持つようになった。スタジアムがコンサート会場化したのである。野球のスタジアムでは、試合の内容自体を楽しむというよりも、応援団ともどもノって盛り上がるのが目的とされているような傾向も出てきた。

1993年に始まったプロサッカーリーグ「Jリーグ」では、この傾向はより顕著になった。Jリーグは「ノリ」を求める若者たちをとらえようと、音楽を巧みに用いた。日本代表チームの応援歌のみならず、Jリーグ各チームの歌が作られ、それらのCDが発売された。曲調もプロ野球のものとは異なり、サンバなどラテン調のものが主流となった。

その他、競馬場、プロレス会場など、観戦スポーツの場がコンサート会場化した例は数多い。そして、コンサート会場化したスポーツ会場では、コンサートの場合と同様「ノリ」が求められるのである。

第二の側面は、「ノリがいい」（調子がいい、調子にのりやすい）、「いいノリをしている」（調子の波に乗っている）、「ノリが合う」（フィーリングが合う）、「悪ノリする」（悪ふざけをして周囲から浮き上がる）など、「ノリ」が音楽の文脈を離れて、さまざまな文脈で用いられるようになったということだ。

「ノリ」という言葉のこのような使い方は、以前からあった。だが、頻繁に用いられるようになったのは1980年代に入ってからである。

「ノリ」は、自己の精神状態を表したり、他者とのコミュニケーションの在り様を表す鍵となる言葉となったのである。

2. ノリの意味

●flow とwave

「ノリ」という言葉は、古代からさまざまな意味で用いられてきた。また、日本の伝統芸能である能楽や義太夫の専門用語としても用いられてきた。だが、「ノリ」には多様な意味をもちながらも、それらを貫く共通の感覚があるように思われる。ここでは、一般的に音楽のノリ、そして音楽以外の文脈におけるノリの意味について考えてみたい。

音楽のノリとは、単純化して言えば、音楽の流れに乗ることである。これには大きく二つの側面がある。

第一に、他者と音楽の流れを共有するという側面である。現象学的社会学の祖の一人とされるアルフレッド・シュッツは、人間のコミュニケーションの本質について議論する際に、音楽コミュニケーションをとりあげた。シュッツは、過去に作曲家が作曲した曲を、今、演奏家が演奏し、聴衆がそれを理解することができるのは何故なのかを説明しようとした(Schutz [1951→1965=1980])。

シュッツは、音楽コミュニケーションが成立するのは、演奏家も聴衆も、それぞれが内的な時間の流れに乗るように、お互いにチューニング・インするからだ、そこに相互調整関係が成立しているからだと説明した。音楽のノリとは、まず内的な時間の流れ(flow)に乗ることなのである。

これは、このような作曲家、演奏家、聴衆という役割分化がはっきりしている場合にのみ適用されるわけではない。盆踊りのような民俗音楽からカラオケまで、音楽のコミュニケーションが成立する現場では、参加者による時間の流れの共有がある、そこで参加者はひとつになるのである。

第二に、リズムによりもたらされる高揚という側面がある。音楽によりもたらされる高揚感

については、たんに流れに乗るというだけでは十分な説明にならない。流れのもうひとつの側面である波 (wave) のもつリズムもノリを構成する重要な要素である。スウィング、ビート、グルーブなどという感覚は、一定のテンポとそのテンポとの微妙なズレから生じてくるものだろう。

●ノリと秩序

これら二つの側面を音楽以外の一般的な文脈にまで広げて考えてみると、第一の側面は他者との関係、秩序の問題、第二の側面は演技・変身の問題とかかわってくる。

第一の側面について補足的な議論をしておこう。「ノリ」と読む漢字の中には、秩序に関連するものが多い。「法」「則」「矩」「典」「憲」「範」「制」「程」「度」は、いずれも「従い守るべきよりどころ」という意味を持っている。「宣」「告」は、宣ること、告げることという意味であるが、本来、単に口に出して言う意味ではなく、呪力を持った発言、重要な意味を持った発言、ふつうは言ってはならないことを口にするという意味とされる。これらは、「ノリ」が元来、秩序と関連していること、さらに古代の祭政一致に関連する語であることを伺わせる。「ノリ」は個を超越し、個を拘束するものであり、権力作用と関連する言葉なのである。神に向かって唱える言葉である「祝詞 (のりと)」も、「宣 (の) る」「のろう」と関連しているとされる。また、占いに用いる器具である「式 (ノリ)」、賭事の「賭 (ノリ)」も、超越的なものと「ノリ」との関連を伺わせる。

●ノリと変身

個人に焦点を合わせれば、ノッている状態とは、通常の時間とは異なった状態である。「仕事がノッている」状態とは、普通の状態よりも勢いづいて調子がよくなる状態である。「ノリがいい人」というのは、調子にのりやすく、その場の雰囲気盛り上げることができる人のことである。他者と調和せずに他者から浮き上がってしまえば「ノリすぎ」「悪ノリ」と言われ

る。

いずれにしても、「ノリ」というのはノッていない状態 (サメ) との比較において語られる。ロジェ・カイヨワは遊びを競争、機会、模擬、眩暈の四つのタイプに分類した。このうち「ノリ」と最もかかわるのが模擬である。カイヨワは、模擬を昆虫の擬態にたとえている。「ノリ」は、変身、演技にかかわっている (Caillois [1958=1970])。

チクセントミハイは、『楽しみの社会学』において、それ自体を目的とするような楽しみについて考察した。彼の議論の中では、flow が鍵概念となっている。彼は flow を「全人的に行為に没入している時に人が感じる包括的感覚」とする。これは、ここで議論している「ノリ」の状態にきわめて近いものである。チクセントミハイの考察は、「ノリ」がなにかの手段として考えられるというよりもその快樂自体が目的となっていることを示唆している (Cskszentmihalyi [1975=1979])。

●ノリの文化圏

以上、「ノリ」は、個人を越えた秩序もしくは権力、変身とそれに伴う快樂という二側面があることを指摘した。この日本語の「ノリ」の語源については諸説あるが、日本列島の周辺にも、日本語の「ノリ」と連関するであろう類義語を見出すことができる。

第一に、沖縄の「のろ (祝女)」は、琉球王朝以来の神職の女性を意味する。祈る人と呪う人という意味であり、神託を宣る人ではなかったかと推測されている (日本大辞典刊行会 [1975], 国立国語研究所 [1969])。これは、「ノリ」の個人を越えた秩序にかかわる側面と関連している。

第二に、朝鮮半島における「놀이 (nori)」は、遊び、ゲーム、スポーツなどを意味する。これは、日本語の「ノリ」の変身に伴う快樂と通じている。韓国にはサムルノリという4人のパーカッショングループがあり、世界的な活躍をしている。彼らのパフォーマンスは、遊びの側から超越的なものに近づこうという志向性を

もっているように見える。

これらの類義語の存在は、「ノリ」という言葉とそれを支える感覚が、かつては東アジア一帯に存在していたことを伺わせる。

3. ノリの現代的意味

1980年代に「ノリ」という言葉が広まったのは、すでに述べたように、当時の音楽の状況による部分が大きいですが、同時に「ノリ」という言葉で表わされるような、時代の気分がそこにあったからである。ここでは、「ノリ」の現代的意味について二つの側面を指摘したい。

● 現代社会への過剰適応としてのノリ

1980年代は、二重の意味で、つまり仕事の場でも消費の場でも、演技する精神が求められる時代だった。

仕事の場においては、オフィスへのOA機器の浸透により、マニュアル通りさまざまな機器を使いこなすことが求められるようになった。また、ファーストフードの店、東京ディズニーランドなどのように、サービス産業の現場では、従業員はマニュアルに基づいた役割を演じることが強く求められるようになった。そのような状況の中で、マニュアルに流されることなく〈自分〉を守るためには、マニュアルに距離をおく演技をする感覚が必要だった。

消費の場においては、1980年代は資本主義が成熟し、記号消費社会へと一気にのぼりつめた時代だった。広告表現を中心に記号による差異化のゲームが展開していった。当時、安部雅子は、消費社会の差異化のゲームに参加するには、バーゲン会場のハシゴをもともしないような「可処分元気」が必要なのだと指摘した（安部 [1987]）。〈自分〉の演出には元気が求められる。

〈自分〉を守るにせよ、〈自分〉を演出するにせよ、演技する感覚が求められ、元気が求められる。この意味において、「ノリ」と元気はほぼ同義である。80年代の「ノリ」とは、成熟した消費社会の快楽を体験することだったといえる。別な言い方をすれば、80年

代の「ノリ」は、現代社会への過剰適応ということもできる。典型的な例をあげよう。

音楽をかけながらクルマを運転する、すなわち「音楽にノリながらクルマにノル」というのは、現代の若者に人気のある行動様式である。この二重の「ノリ」には、それだけの快楽があるのだろう。その快楽の質についてはほとんど考察されておらず、今後の重要な課題として残されている。

ただ、この行動様式は、現代社会へのひとつの適応の仕方であるということではある。つまり、今日の日本は経済的に豊かになったとはいっても、空間と時間に関しては、必ずしも豊かとは言いがたい。住空間と余暇時間については、けっして一流とはいえないのである。そこで、貧しい住空間の代替物となってくれるのがクルマであり、短い余暇時間を埋めてくれるのが音楽なのである。そして、両者が同時に解決されるのが「クルマにノリつつ音楽にノル」という行動である。クルマと音楽を貫く「ノリ」は、まさに今日の日本社会への過剰適応なのである。

● 新たなる秩序の希求としてのノリ

ここで「ノリ」が秩序と関連する語であったことを思い起こしたい。「ノリ」の現象には、新たなる秩序への希求が含まれているのではない。

1985年7月、ロンドンとフィラデルフィアの2つの会場を舞台にして行われた『LIVE AID』は、世界80ヶ国以上の国でテレビ放送された。これは、有力なロックミュージシャンたちが出演し、アフリカの飢餓に苦しむ人々を救おうという地球的規模でのチャリティー・イベントだった。ロックという「ノリ」を命とする音楽を通して、新たな秩序が追求されたのである。つまり、ここには「ノリ」の快楽追求の側面と個を越えた秩序の側面との両面が見出されるのである。

1990年代に入って、いわゆる「バブル崩壊」後は、タテマエでは、80年代のお祭り騒ぎを回避しようとしているように見える。しかし、ジ

ユリアナ（ディスコ）現象，カラオケボックスブーム，Jリーグブームなど，新たな表層の「ノリ」現象を見出すことはできる。また，「ノリ」という言葉は，もはや流行語ではなく，日常の用語として定着している。

一見すると，刹那的な快樂追求に終始しているように見える，さまざまな「ノリ」の現象も，注意深くみれば，新たな秩序や共同性への希求を読み取ることができる。実際，90年代以降のさまざまな「ノリ」現象は，秩序の側面が強くなってきているように見える。新たな秩序や共同性への希求を読み取ることが，次の社会と文化を構想する大きな手がかりになるように思われる。

③ 「ノリ」の解説へ

以上見てきたように，「ノリ」現象は，きもめて現代的現象であるが，「ノリ」という言葉自体は，古代の祭政一致の状態に由来している。「ノリ」現象と「ノリ」という言葉の急速な台頭は，政治と文化，経済と文化の関係の変動の現れである。「ノリ」の構造を把握し，「ノリ」現象を広く社会的文脈で解説していくことが今

後の課題である。

※本稿は，拙著『音楽する社会』（1988，勁草書房）第3章「ノリの体験」および「“ノリ”とは何か——80年代のノリと90年代のノリ」（『月刊アドバタイジング』1994年8月号）に基づき，新たに書き改めたものである。

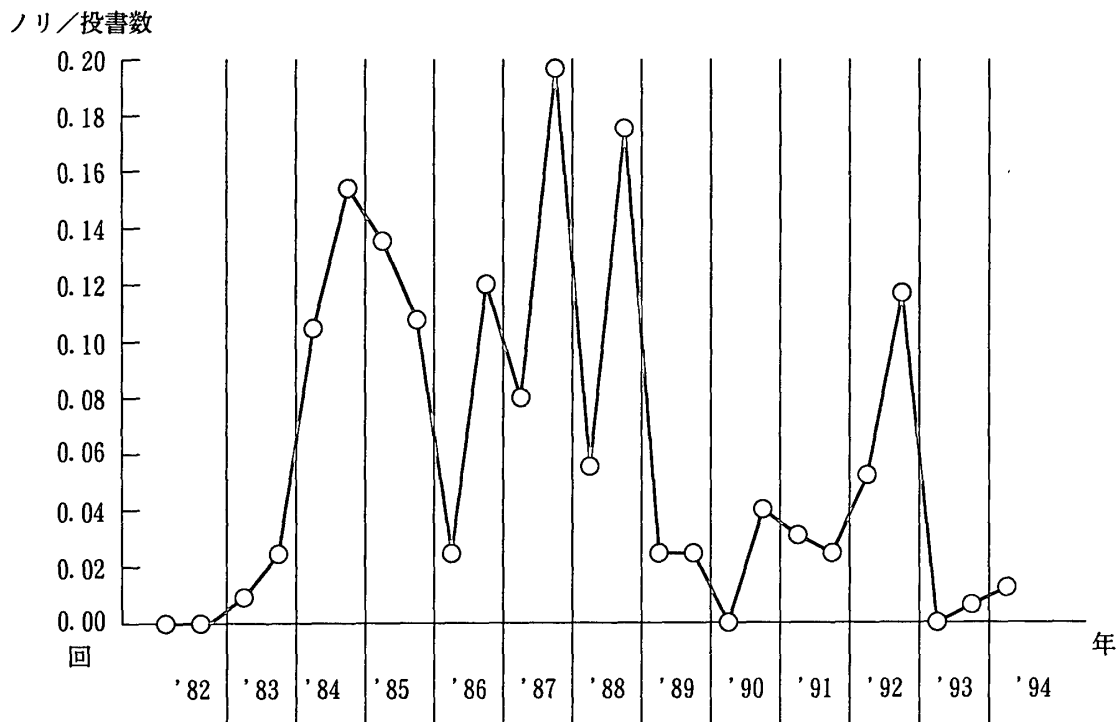
（注）投稿欄「YOU と PIA」に寄せられた投書に現れた「ノリ」「ノル」という言葉の総数を掲載投書総数で割ったもの（ノリ出現率）を半年毎に集計したもの。あくまでも書かれた言葉であるので，話し言葉とは異なる。また，雑誌の投稿欄に投稿するには，書く能力や気力を必要とする。したがって，このデータが日常的な場面での言葉の用法を必ずしも反映しているわけではない。しかし，時系列的にみれば，「ノリ」という言葉の台頭を読み取ることができる。

〔文 献〕

安部 雅子 1987 「可処分元氣」、『電通報』3542（1987.9.17）。

Caillois, Roger 1958 *Les jeux et les Hommes* :

表：「ノリ」の出現率の推移（1982～1994）



Le Masque et le Vertige, Gallimard. → 1970
清水幾太郎・霧生和夫（訳）『遊びと人間』, 岩
波書店。
Cskszentmihalyi, Mihaly 1975 *Beyond Boredom
and Anxiety*, Jossey-Bass. = 1979 今村 浩明
（訳）『楽しみの社会学』, 思索社。
国立国語研究所（編）1969『沖縄語辞典』, 大蔵省
印刷局。
日本大辞典刊行会（編）1975『日本国語大辞典』,
小学館。

Schutz, Alfred 1951 “Making Music Together:
A Study in Social Relationship” *Social Re-
search*, 18-1 : 76-97. → 1964 Brodersen, Arvid
(ed.)
Collected Papers II, Studies in Social Theory,
Martinus Nijhoff. = 1980 中野卓（監修）・桜井
厚（訳）『現象学的社会学の応用』, お茶の水書
房。
千石 保 1991 『「まじめ」の崩壊』, サイマル出版
会。

小川博司氏の報告をめぐる討議

小川博司氏の報告本体は明快・達意、総括を付加する必要は、正直なところ皆無というべきであろう。「要旨」部分は司会役をつとめたものに義務づけられた「駄足」にすぎない。

'80年代以降、ポピュラー音楽の分野を皮切りに社会、各分野で多用されるようになった「ノリ」や「ノル」ということばは、小川氏によると、ロックのリズムにいかにかノルかノセるかという形で濫用されたことに由来するらしい。

そして、ひとが「ノって」いる状況は、つぎの2つの側面をふくんでいる、と氏は指摘する。つまり、個人として「高揚」し「快樂」している側面と、おなじ場に居あわせた他者とともに内的な時間を共有し、おなじリズムなりプレーなりに「ノセ」られ絡めとられ、その意味では秩序づけられているという側面である。「ノル」ことによって解放される反面、ノったりノセラれたりするノリモノをつらじて秩序づけられる、という両面が指摘されるわけである。

氏によるとそうした「ノリ」の2重構造の「発見」は、ノルということばの語源的な多義性から発想されたものであるらしい。

すなわち——シャーマンなり古代王権の保持者なりが、聖なるものから示されたことばを「宣る」「祝る」。そのことばは、共同体のなかに言霊としてひびきわたり成員を感奮・興起させるとともに、共同体を律する法ともなっていく……。

おわりに小川氏は、追究すべき課題として2つの興味ぶかい問題点をあげる。1つは、沖縄や朝鮮に存在する「ノリ」類義語の分布を手がかりに「ノリの文化圏」が想定できるかもしれないという可能性であり、いま1つは、「ノリ」が現代人の社会にたいする過剰適応のほどをあぶり出すキーワードになりうる、という主張である。

ノリは、「やまとことば」をルーツにするコンセプトであるだけに、日本人の心性の古層にひびくゆたかな分析道具に成長する可能性を予感させ、活潑な討議を呼んだ。'90年代以降の政治・経済と文化のかかわりを解くうえで「ノリ」概念がどう展開されていくか、たのしみだ。

以下に、討議の一部を摘記する。

まず啓明大学校側からは金南炫教授、金栄建教授、金致洪副教授、金鎬彦副教授、権業助教授らが発言し、小川氏が応答した。

「社会学者としての小川氏がなぜノリということばをとりあげたのか？」という問いにたいし、小川氏は、自分は現代社会をかねてから音楽の浸透した「音楽化社会」としてとらえており、そのため音楽の3要素とかがえている「音」「ノリ」「時間」の3つの概念がつねに自分の念頭にある、と説明した。

「＜クルマにノリつつ音楽にノル＞というが、それは本当に可能か？」。この問いには、速度制限のないドイツのアウトバーンでは運転自体が快樂になっていて音楽にノル快樂は不要かもしれないが、日本の道路状況ではここにいう2重のノリは大いに意味がありうる、と氏は答えた。

そして、「現代社会のなかで、またその様々な組織のなかで Identity crisis を経験していて＜ノリ＞どころではない個人にとって、＜ノリ＞概念はどこまで有効か？」「これからの社会でノリ現象はどんな運命を辿るとおもうか？」という問いにたいしては、以下の答えがあった。

個人と組織、個人と社会の接点をさぐるキーワードとして、まさに「ノリ」というコンセプトを提示したい。これからの社会のノリ現象はキメこまかくかんがえていく必要があり、「クルマにノリながら音楽にノル」という行動パタ

ーンが成立すること自体、20世紀の新しい技術やメディアが可能にした現象である以上、こんごの社会が生み出す「新しい装置」が人間の感覚やコミュニケーションをどう変えていくかをフォローするのに「ノリ」概念は有効とおもう、と。

ほかに啓明大学校側からのユニークな示唆として、東アジアの大乗仏教圏では衆生済度こそ仏陀の教えとする「大きなノリモノ」観が、厳しい戒律をこととする什乗仏教圏と対比して語られるが、大いなる真理に乗るといふ仏教文化の観点からも「ノリ」概念の吟味をこころみてはどうか、というのである。

桃大側では、沼田健哉、竹中暉雄、全在紋、松永俊男、伊代田光彦、村田晴夫らの諸教授や司会者が質問した。

それらの問いの1つは、「<ノリ>ということばはなるほど'80年代にひろがったかもしれないが、ノリ現象そのものは以前から存在したはずだ。この現象をあえて<ノリ>と名づけることでなにが明らかになるのだろうか？」というもの。

これにたいする答え：若者文化のなかでノリということばが使われることにより、ノリ現象が自覚されるようになった点に重要な意味がある。「ノル」ためにコンサートに行く、自ら立上って積極的に「ノッ」ていく、という行動が積み重ねられるなかで「ノリ」の自己制御という感覚・能力が生まれているのではないか。

そのさい、「ノリということばが流行ることによって、いつの世にも存在したノリ現象がより強化・高揚されるようになったといえるだろうか？」

小川氏の答え：ちがいが生まれたことはたしかだが、状況は微妙。たとえば、カラオケを介

してノッてみせているようでかえって個人間のコミュニケーションが稀薄になっているかもしれない。また、ノリということばを使わないとノリにくくなったといえるかもしれない。

そうだとすると、「ノリながらもノセられにくくなったという、若者の自己制御能力の成長をしめす具体的事例ありや?」。おなじことの違いになるが、「ファッションのもとでのノリと今の時代のノリとがちがうとすれば、両者のちがいのメルクマールはいずこにありや?」

氏の答え：メディアが仕掛けるイベントが思いどおりに行かない場合がまま見られるようになっていて、さらに事例を集めたい。この10数年には経験したことのない新しいイベントを仕掛けられた場合に免疫力が発揮できるかどうか、に注目することも必要であろう。

「プラスとマイナスの両面をもつノリ現象をもっぱらプラスの方向に引きつけて解釈してはいないか?」「ノリということばを若者たちは単純なかるい意味で使っているにすぎないのだとすると、そこに'80年代の特徴をみるというのは読み込みすぎではないか?」。この問いにたいし小川氏は、どんな新しい社会が到来しようとしているのかを念頭に、新しい要素、新しい可能性を過剰にみようという立場にわたくし自身意識的にノろうとしているのです、と応じていた。

ちなみに、「欧米ではノリ現象をどんなことばで示すのか?」。答え：「のっているかーい?」は、Are you all right? といったところ。ノっている状態を形容することばとしては、cool, groovy など。

以上。

(鈴木博信*)

* 本学社会学部